

The Gallery voice

NO-47

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2011.11.18
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

Cube-Babel 2

栗国久直

見よ。彼等是一个の民で、みなが一个の言葉である。そしてこれらを彼等は始めたのだ。いまに彼等が企てる全て、もはや不可能なものが無くなってしまおう。さあ、われわれは下って行って、あそこで彼等の言葉を混乱させ、誰も他人の言葉がわからなくしてしまおう。

旧約聖書に描かれたバベルの物語は、人々が神の怒りに触れて混乱して行く姿を映し出している。

Babel 2と題された制作は、世界の人口が100億人を突破した後の風景の物語である。更に日本人口が7千万台に近づいて行く頃に成る。推移から、一世紀を待たずに訪れる世界である。日常の様々な課題に直面する普通の私達が、考え議論して行く世界ではないだろう。誰も経験した事のない世界が有ると言われている。

過去の戦争を考える事を通して、Cubeと称された制作は続けられて来た。その場面で、人は何故に共存出来ないのかを考え提示し続けて来た。幾重にも繰り返されて来た破壊と暴力と、憎しみに近い嫌悪感が漂っていた。そこには共に生きて行く事を望まない人の社会が存在していた。

現代でも、世界の至る所で民族や宗教や、異なる社会が紛争を抱え込んでいる。多様化して行く文化の共存の中で、相容れない感覚すら私達の日常は抱え込んでいる。その悲惨な風景から多くを学び、語り継いで行こうとして来た。そして物語へと続く未来へも、私達に降り掛かる戦争や紛争の影を払拭して行く様にして迎える世界なのだろう。

宮崎駿の作り出す世界で、小さな粘菌のくだりが有る。多種の粘菌が入れられた培養皿の中で、勢力と糧を得るため互いに干渉し合い共食いを始める。そして、入り乱れる様な争いの後で、各種がバランスを保つ様に共存して行くという話しである。それもまた、絵空事の話しだが、実にリアルに感じてしまう。

Babel 2の世界も架空の物語には違いは無い。それを基に作られた制作も絵空事の世界に属している。

ただ、人口の推移だけは確実に訪れる世界には違いは無い。そこでまた、どのような問題や課題に直面して行くのかは架空の話しではない。そういう世界に生きて行く中で、人々が何を守り、何を変えて行くのかは定かではない。属する民族や言語、文化や慣習もどのように変異して行くかも定かではない。また社会を構成して行く人々も、多種多様に入り乱れた背景を持つものかもしれない。ただ、過去を学び現代を生きて行く私達は、共存して行く意味と命への尊厳を伝える事は可能だと考えている。いや、そうあって欲しいと願っている。残念だが、少なくとも私は生きてはいない世界だとも言える。



「Cube-Babel 2」物語 (A4紙500枚/約817000字) 2011年

共に生きて行く事を拒む姿が戦争や紛争ならば、共に生きて行く姿とはどのようなものなのか。世界の何処かで、今なお続いて行く共存出来ない世界を超えて行く為に、問い続けて行くだけだろう。

遙か以前に描かれたバベルの話しは、どのような罪を犯したのかは描かれてはいない。

ただそこには、人々是一个の民であり、一个の言葉であると書かれている。

(あぐに・ひさなお/美術家)

栗国久直「生命と戦争」展に寄せて

小島 静二

いつの世においても、世界中何処にあっても戦争の無い時はなく、そのために悲惨な状況を見せつけられ、人類の愚かさとその悲しみにこころを痛め、自分自身の内に矛先を向けることに耽っていた時があった。何故に人々は戦わねばならないのか。その戦いのために、家族・同胞・故郷を失くし、双方に恨みを抱き、先人の汗と血の滲む労働の継続により築き上げてきた歴史さえも瞬時に破壊へと導いてきた。

しかし、視点を変えて‘生命’を再考してみると、生命の本来の表現形態が、戦いであることに辿りつく。つまり、生存競争に打ち勝ち、強く、逞しいものへの希求を生命の本質としていることである。このことは、生命の原点である、‘生殖’にしても然りであるし、また種の保存においても弱肉強食は、その典型であろう。これらのことは、有史以来環境の変化に追随しなければ、生存し得ないという大原則の中で必然的に培われたものとも執れる。更に、球形をしている地球においては、局所的な気候環境の違いや、日照を主とする温度環境の差によっても大いなる生き方に違いが生ずるのは当たり前のことと取れる。その環境に適した生き方やものの考え方、即ち哲学や宗教が創生し、それを礎に生きてきた人々を相互比較や、同一のメジャーにて推し量ることは不可能であり、更に、単一の絶対観が総てを包含し、賅える程単純でないのは至極明解な筈である。

しかし、その基本原則に楯突き、自分の正義を矛にして、征服への意欲を持つ輩の存在も抑止できぬ現実である。特に、科学技術や人的資源を駆使して、莫大なる経済効果を生んだ国家の支配者たちは、異口同音にこの念仏を唱え、その戦略に奔走するのが常である。戦争の意味は、それにより導かれた結果に対し、反省や後悔も含めて生命の円環的成長を遂げる役割を担っているのではなかろうか、ということなのである。即ち、戦争のあり方の基本は、生命そのものを脅かすものであってはならないという原則の下にある。

生命（体）には、不ずと持っている‘意思を具現化する機能’があるように思えるのである。恐らく、生命の意思は、そのものが既に戦争を携えているのではなかろうかとさえ思える今日この頃である。

20年程前にならうか、栗国久直氏の「Moon」シリーズの作品群（海の中から眺める月）を初めて鑑賞した時、前述したような私自身の想い、つまり自分の生命観がス

トンと腑に落ちたのを今でも克明に覚えている。栗国氏は、その後も彼の作品群において、様々な人類の犯した事象を俯瞰にて見ており、然もその引きを執っている視線が、それらの事象を更に客体化し、恐ろしいほどの戦慄と畏怖とを見る者たちに突きつけてくる。これは、栗国氏の他に類を見ない才能であり、評価に値するものと言えるだろう。

しかし、現において起こりうる事象と、それを一断面として積層してゆく普遍的様相とは、（一見するとよく似ているが）全く異なるものである場合が多いことと同様に、栗国久直という一人の美術家が、彼自身の策を秘めた意思にて表現していることと、それらの脈絡を追い続けた挙句の総合的様相つまり彼の生命の希求することとは何か異なる気がするのである。社会派と捉えられる所以であるモチーフとその表現形態をもって彼を括することは、現人（うつつびと）としての彼を捉えられたとしても、それは生命の形の一断面に過ぎないのである。



「Cube-Babel 2」 物語（ドローイング） 2011年

かつて、栗国氏と「言葉地図」の作成を巡って往復書簡をしていた時があった。その時、彼は『海の山、山の海』という言葉に私に投げかけてきた。この言葉は、私の胸の奥深くにじんわりと入り込み、時間の経過と共にイリュージョンとしてより鮮明になってきたのである。このことに関して私の感じるままに言えば、これこそが栗国氏の本質、つまり生命の形を感じるのである。たゆたう波のように茫洋としているが、彼の生命の在処を示し、審判として、また生存の意義を問う役割を忠実に証しているように思えるのである、たとえ現の栗国氏がそのこと自体に気付いていなくとも。

いつの日か、その全貌が明らかになるのを傍観者として立ち会える日を夢見て、これからも栗国氏の作品群を眺めて往きたいのである。

（こじま・せいじ／小島びじゅつ室主宰）

過去を忘却することに抗う想像力

金平茂紀

沖縄戦のなかでも熾烈を極めたシュガーローフの戦いでは、日米両軍のみか沖縄志願兵や民間人も含め夥しい数の死傷者が出た。米軍の公式発表では米側の死傷者数は2662名にもなる。日本側の死傷者は推計さえもない。ほぼ全滅してしまったので不明なのだろうか。戦後、長い年月が経過した後に、この地区の再開発が行われた際、土中からは多くの人骨が出てきた。沖縄戦が本土決戦のための「捨て石」と位置づけられたように、シュガーローフの戦いは、沖縄戦の中で、旧日本軍司令部があった那覇・首里の防衛のための最後の砦、言い方を変えれば「捨て石」とされたのだ。シュガーローフはもちろん米軍が命名したこの地の呼び名だ。もともとはアメリカ南部の砂糖菓子パンから由来しているのだが、高さ15メートル、長さ100メートル足らずの丘陵の形状からこのように言われのだという。日本軍は安里五二高地と命名していた。

66年前、日米両軍の間で激越な戦闘が繰り広げられたこの地の周辺は、今は再開発されて、のっぺらぼうのような無機質な風景が現出している。大規模スーパーや大規模ファミレス、大規模パチンコ店が無秩序に立ち並んでいる。今年10月はじめ、僕はこの地の風景を前にして「皆さんのいるこここそがアメリカナイゼーションのなれの果てではないですか？」と問いかけた。沖縄の人たちにだ。沖縄と縁の深い写真家の東松照明の写真展にちなんで開かれたシンポジウムの席でのことである。場所はシュガーローフに近い沖縄県立博物館・美術館だった。東松の写真展のテーマ自体が、アメリカナイゼーションを拒む良質で強靱な沖縄文化の存在にあった。東松自身がかつて宮古島に移住して体感したものがそれだった。かつて「沖縄のなかに基地があるのではない。基地の中に沖縄があるのだ」と喝破した東松がたどり着いたものがそれだったのだ。だが、県立博物館・美術館を取り巻く風景は、敢えて言うのだが、無残なものだった。こんなことを言って申し訳ないと思ったが、言ってしまったものは取り返しがない。

東松の宮古島生活から40年もの歳月が流れた今年、奇しくもその宮古島で1965年に生まれた栗国久直が問うているものは、沖縄戦という過去である。もはや戦世は不可視か？ だが、栗国の創作にはこの不可視とされかけているものに対する強いこだわりがあるようだ。戦争は見えないものなのか。いや、戦争の記憶を消して

いこうという力、忘却を押し進めるものに対する抗い。それこそが、土地、場所、空間にまつわる霊的なものとの交流＝死者と生者のまなざしの交差なのかもしれない。死者は忘れてほしくないのだ。最近、こころを打たれる文章に出会った。死者はくわれらと共存し共生し共闘する> (若松英輔。『協同する不可視な「隣人」～大震災と「生ける死者」』より)。3月11日の大震災によって、多くの死者たちと共存し共生し共闘する>僕らが、沖縄戦の死者たちとまなざしを交わすことが求められているのだ。怒りを込めて忘却を押しとどめよ。



映像作品「CROSSING -交差するまなざし-」より 2011年

柄にもなく、こんなアジビラみたいな文章を書いているのは、僕にとってはほとんど未知の美術作家・栗国久直の作品について熱情をこめて僕に語ってくれた畏友・土江真樹子にやられてしまったからでもある。僕は、栗国の作品については、2005年に東京・小島びじゅつ室で開催された『空爆』展について、ネット上でわずかな知識しか得たにすぎないし、直にみた作品は、土江が何年か前に沖縄県立博物館・美術館で展示したガラスの大型立方体作品だけである。それがこのたびは、美術家・大山健治氏と土江が栗国の連作「BABEL」の最終章にあたる小説「Cube-BABEL2」に触発されて、映像作品「CROSSING -交差するまなざし-」を作った。今現在は、安里配水池公園となっているシュガーローフ帯。公園の石段の下に眠る死者たちの声に耳をすませること。大山・土江作品からは、そのように僕らが耳をすませた時に聴こえてきた音そのものが使われているように感じた。それは死者の声のようでもあった。

(かねひら・しげのり / TBS「報道特集」キャスター)

HISANAO AGUNI



栗国久直について

栗国久直氏は大阪を拠点に精力的に美術活動を続けている。画廊沖縄では3年ぶり4回目の個展となる。過去においては「Diagram」(2000年)、「Diagram / Cube」(2002年)、「Sugar & Strawberry」(2008年)の個展。今展は「Cube-Babel2」を開催する。また、東京や関西の画廊では「空爆」(2005年)、「Trinity」(2008年)、「Babel」(2008年)の作品を発表してきた。平面(絵画)から立体、インスタレーションへと自在に往還しながら、地域と文化、心性と存在、社会の制度と状況、場と歴史、人類と進化(科学)など、さまざまな角度から切りこみ、事象の本質と核心にせまるテーマを美しい可視体として提示してきた。浅学の画廊主の私は、美術家・栗国氏の視野の広さと思考の深さ、作品の質の高さに目を奪われ、刺激され、気付きと多くのことを学ばせてもらった。

栗国は2007年、沖縄県立博物館・美術館の開館記念展にインスタレーションの大きな立体ガラス作品「Sugar&Strawberry」を提示した。那覇新都心の「場」が1945年日本軍と米軍の激戦地であったことをコンセプト軸に制作したものだった。「戦争」という国家的な人類の行為に対する栗国の見識の証左であり、強烈な抗いに思えた。あのガラスに刻まれた画像が壁面に乱反射する様は、磁場がもたらした重厚な叙事詩のようであり、目から心に響く作品であった。3.11の大震災と原発放射能汚染問題、沖縄の米軍基地問題など、大きな国家的課題を抱えた今日の社会状況にあって、栗国のあの作品に向き合うことの大切さを思う。その作品は県立博物館・美術館のコレクションになってい

るのだが、観ることが出来ないのはとても残念だ。ぜひ、常設展示して欲しいものである。

現在、県立博物館・美術館のコレクション展には、栗国の作品「August Moon ~花の終わりに」(1999年)が展示されている。15年前の真冬、夜明けに起きた阪神淡路大震災の体験で、これまでの自己の美術認識が変わったと栗国は語った。神秘的でハードコアな栗国芸術の出発点となった作品である。

さて、今回は「生命-War」のテーマで個展に臨んでもらった。個展の展示内容やもろもろの確認作業の会話のなかで、「今回の個展の展示は物語(小説)です」「読む気があれば送りますが、ちょっと体力が要るでしょう」栗国のあつけらんとした電話の声だった。「小説」? 「本」の展示? 戸惑いながら再確認した。A4用紙(1700字)の500枚の大容量(本GV紙1項画像参考)だということである。後で、そのダイジェスト版(10枚)を読ませてもらった。現在から一世紀ほど後の未来の沖縄、日本、アジアの風景である。中国と米国が同盟関係を結び、沖縄の米軍基地がすべて不要撤去になり、それに匹敵する機能の米軍基地が台湾に移されるという時代設定のフィクション(物語)である。物語名は「Cube-Babel2」と記されている。

栗国はMoonシリーズ以降、科学万能主義やグローバルイズムの潮流に杭をさすように、言語や固有文化の問題、原爆(発)の問題、遺伝子組み換え問題など、さまざまな課題の因子を含入した作品を数多く制作してきた。人類の「おごり」への警鐘、「固有性」の尊厳を示すものだった。今回の「Cube-Babel2」は旧約聖書の「バベルの塔」に象徴される「混乱」も内包したものである。

栗国の表現世界は3.11の東日本大震災も想定内にあったのだろうか。物語の題名や内容が妙に共振する。今回の「Cube-Babel2」は栗国が活動し提示してきた作品文脈の集大成的作品になるであろう。

今展では前述の物語「Cube-Babel2」を、映像ジャーナリストの土江真樹子氏、美術家の大山健治氏の協力を得て、映像作品「CROSSING -交差するまなざし-」(17分)を制作発表する。映像編集を担当した大山氏からダイジェスト版(5分)を見せてもらった。那覇新都心の地層の記憶と現実の風景が交差する美しい映像であった。旧約聖書の「バベルの塔」を今日の社会に重ねる想いに至る。未来を悲観するか、楽観するか、個々の想像にゆだねるしかない。いずれにせよ希望の持てる社会を望まない者はいないはずだ。個性の強い3人のコラボレーションの作品がどのようなメッセージを放つか楽しみにしている。今年の通年企画展「生命-War」の最終章を締めるに相応しい展示会になるに違いない。(画廊主/上原誠勇)

栗国久直 / Hisanao Aguni

経歴

1965年沖縄県生まれ。

大阪芸術大学芸術学部卒業。大阪在住。

個展

- 1997 GALLERIA CHIMERA(東京)
LA FENICE(大阪)
- 2000 「Diagram」 画廊沖縄(沖縄)
- 2001 「Diagram Cube」 LA FENICE(大阪)
- 2002 「Diagram Cube」 METAL ART MUSEUM(千葉)
「Diagram/Cube」 画廊沖縄(沖縄)
- 2005 「空爆」 小島びじゅつ室(東京)
- 2008 「Sugar&Strawberry」 画廊沖縄(沖縄)
「Trinity」 小島びじゅつ室(東京)
「Babel」 ギャラリー四門(神奈川)
- 2010 「Cube/lost」 Silver Shell (東京)
- 2011 「Cube-Babel 2」 画廊沖縄 (沖縄)

グループ展

- 1995 「Report on」 LA FENICE(大阪)
- 1996 「'96 ART Progres」 AD&A ギャラリー(大阪)
- 1997 「青の時間」 LA FENICE(大阪)
- 1998 「EGO-SITE」 アートガーデン・かわさき(神奈川)
「シガ・アニュアル '98」 滋賀県立近代美術館(滋賀)
「Collector's item '98」 AD&A ギャラリー(大阪)
- 1999 VOCA'99 上野の森美術館(東京)
「PRELUDE」 LA FENICE(大阪)
「現代日本絵画の展望」 東京ステーションギャラリー(東京)
- 2000 「Za collection」 Za Gallery 横浜(神奈川)
「Za collection Refined Sensibility」 Za Gallery 文京(東京)
「オープニングフェスタ」 AD&A ギャラリー(大阪)
- 2002 「沖縄美術 復帰30年軌跡と展望」 読谷村立美術館(沖縄)
- 2003 「栗国久直・フジイフランソワ・与那覇大智」 LA FENICE(大阪)
「破壊しに」 GALLERIA CHIMERA(東京)
「Chiba Art Flash 03」 千葉市民ギャラリー・いなげ(千葉)
- 2004 「花鳥風月の遺伝子」 LA FENICE(大阪)
「Resonance」 LA FENICE(大阪)
- 2005 「出雲玉造 アートフェスティバル」 玉造温泉(島根)
- 2007 「沖縄文化の軌跡 1872?2007」 沖縄県立博物館・美術館(沖縄)
- 2008 「情熱と戦争の狭間で」 沖縄県立博物館・美術館(沖縄)
「沖縄・プリズム」 東京国立近代美術館(東京)

■ 映像作品「CROSSING -交差するまなざし-」(17分) / コラボレーション作家の略歴■

PROFILE

大山健治 Kenji Oyama

1995年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
1997年 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程終了

展覧会歴

1994年 「Silent Atmosphere」展 (東京藝術大学展示室)
1996年 「Usual Atmosphere」展 (谷中)
「榎倉康二と14人の作家展」 (横浜ガレリア・ベリーニの丘)
1997年 新宿高島屋 タイムズスクエアオープン記念展 「ウォーキングミュージアム展」(新宿高島屋)
2003年 「現代おきなわ芸術展」 (那覇市民ギャラリー)
2007年 「沖縄文化の軌跡1872-2007」(沖縄県立博物館・美術館)
2008年 「しまくとぅば 未来へつなぐアート展」 (沖縄県立博物館・美術館)
2011年 「VISION」展 (ギャラリーpoint-1)

受賞歴

2000年 シーグラフ 2000 (アメリカ) 最優秀賞受賞。
2002年 沖縄広告協会広告賞銀賞受賞
2006年 THE FWA (イギリス) THE BEST OF DAY受賞
2008年 沖縄広告協会広告賞金賞受賞

琉球大学非常勤講師 (2005年度)。美術館の企画展「情熱と戦争の狭間で」(2008年)、「移動と表現展」(2009年)、「タカエズトシコ展 -In Memory of my Parents-」(2010年)、「安谷屋正義展 -モダニズムのゆくえ」(2011年)(沖縄県立博物館・美術館)の企画・展示ディレクション、ビジュアルデザインを務める。

土江真樹子 Makiko Tsuchie

1983年 読売テレビ株式会社 制作部アシスタント
1985年 アメリカカリフォルニア州立大学マセッド校 アートコースアシスタント
1992年 テレビ朝日那覇支局
1995年 琉球朝日放送 報道部記者
2003年 名古屋テレビ コンテンツ局ドキュメンタリー班ディレクター
2005年 フリーディレクターとして独立
2007年 沖縄県立博物館・美術館 指定管理業者・文化の杜 企画担当
2008年 「情熱と戦争の狭間で」展・企画担当
2008年～2011年 滋賀大学経済学部特任准教授 (ジャーナリズム、映像プロジェクト担当)

受賞歴

「43年目の証言」アジア国際テレビ映像祭 特別賞 (1996年)
「存在と証明」平和・協同ジャーナリスト賞 (2001年)
「告発～外務省機密漏洩事件から30年、今語られる真実?」
日本民間放送連盟 九州沖縄地区報道部門最優秀賞、日本民間放送連盟賞 報道部門優秀賞、平和・協同ジャーナリスト賞 (2002年)
2002年度 放送ウーマン賞「メディアの敗北」JCJ賞、「地方の時代」
映像祭優秀賞、平和・協同ジャーナリスト基金優秀賞 (2003年)
「礎」「地方の時代」映像祭推奨賞 (2004年)
「わたしたちは戦争を見たか」ギャラクシー前期推奨賞 (2005年)

著書

『ジャーナリズムの条件 1 職業としてのジャーナリスト』(共著) 岩波書店
『豊かで複雑な僕たちのこの世界 森達也対談集』作品社
『可視化のジャーナリスト』(共著) 早稲田大学出版部

